

翻 訳

彭利貞

中国語情態動詞の表すモダリティ

——情態動詞のカテゴリーとその位置づけ——

薛 鳴 (訳)

[解題]

本稿は彭利貞 (2007) 『中国語モダリティ研究』 (原題《現代汉语情态研究》, 中国社会科学出版社) の第二章の第一節を翻訳したものである¹⁾。著者は浙江大学人文学院中国語言文学系教授。本書は復旦大学中文系中国語学専攻の博士論文を加筆したもので、シリーズ「言語と認知科学」(全8巻)の中の一冊である。472頁に及ぶ本書は六章から構成されている。

第一章「情態の意味体系」はモダリティについて先行研究を踏まえながら、論理学と言語学の立場からモダリティを認識的モダリティ、道義的モダリティ、動力的モダリティに分けることの合理性を論じた。第二章の「中国語情態動詞の表すモダリティ」は先行研究を検討し直し、モダリティを表す主要手段である「情態動詞」について、その名称、位置付け、機能、分類の基準などから考察し、「動詞—情態動詞—副詞」という連続体の仮説を提起した。第三章「情態と情状」は動詞の情状(性状)的特徴(静態動詞か動態動詞か)が多義的情態動詞と共起したときの意味解釈に与える影響を考察した。第四章「情態と体」はモダリティとアスペクトの関係、主にアスペクトとの共起関係を分析した。第五章「情態と否定」は否定がモダリティに与える影響を分析し、情態否定の相補現象や主に“没”による外部否定と内部否定及び二重否定などの情態動詞の解釈への制約を考察した。第六章「情態動詞の共起」は情態動詞の共起が多義的情態動詞の意味解釈に与える影響について検討した。

モダリティの研究は古代ギリシア哲学まで遡ることができる。アリストテレスはそのモダリティ理論の中で物事のあり方に必然、可能、偶然及び不可能という要素(変数)の存在を提起した。言語学の分野においては20世紀70年代から印欧語ではモダリティの意味が注目され始めた。その表現の手段としては英語では法助動詞である。話者がその発話の命題をどうとらえ(可能か不可能か、現実か非現実、断言可能か不可能か)、聞き手にどういう心的態度で接するかに関わる問題を扱う²⁾。

一方、中国語ではモダリティ表現を担う一類の語を英語に倣って助動詞とする言い方や意味から「能願動詞」とする言い方が主流であったが、のちにモダリティをまさに「心情」と

「態度」を一つにして“情態”という語が使われ始めるようになった。本書の著者もそれを支持しモダリティを表す一群の語を動詞と見なし、それを“情態動詞”としている。

本篇の翻訳に際して、モダリティ動詞を表す“情態動詞”という用語をそのまま「情態動詞」とするが、用語として使うとき以外の“情態”には「モダリティ」を用いる。同様に“范畴”も用語としてはそのまま「範疇」とするが、それ以外は「カテゴリー」を用いる。したがって、「情態」と「モダリティ」、「範疇」と「カテゴリー」は基本的に同義で用いることになる。本篇に挙げられる多くの文献はこの訳文の参考文献として挙げることはせず、原著の参考文献で確認されたい。なお、それらの文献の著者名は日本語の常用漢字にない漢字は中国語の簡体字を使用したため、統一性を図るためにすべて原書のままの簡体字を使用している。

本書は情態動詞を全面的且つ体系的に考察した価値ある研究書である。訳者が大学院中国研究科の「中国語学研究」で教材として使用している。学生諸君と時には一語一文吟味し議論を重ねながら理解が深まっていく。その実感がこの本を紹介していこうと考えるきっかけとなった。頁数の関係で今回は第二章の第一節に留まるが、そのために原書の章、節の番号を適度に調整した。なお、第二節「情態動詞の機能と分類」、第三節「中国語情態動詞の意味的系統」についてもこれから紹介していきたいと考える。

中国語情態動詞の表すモダリティ ——情態動詞のカテゴリーとその位置づけ——

モダリティを意味論的に自然分類の一つとするのは、おそらく疑う余地がないだろう。なぜなら、どの言語においてもこの種の意味を表すものを必要としている。これまでの論述から、モダリティを表す手段が異なり、どの手段を用いて表すか、言語によってはそれぞれ特徴があるということが分かった。モダリティの言語形式として、情態（モダリティ）義を含む主要動詞、情態動詞、情態副詞、文末情態助詞及びアクセントやイントネーション、またある言語では動詞自身の屈折変化によって各種のモダリティを表すことができる。

多くの言語において、モダリティを表す手段の中で、情態動詞がモダリティを表す最も主要な形式である。しかし、情態動詞の固有な複雑さから、モダリティの研究においては、多くの研究者は情態動詞に注目し、研究の過程においてまだ多くの未解決の問題も存在している。

大方の研究者は、言語の中でモダリティを表す閉じた機能類、すなわち情態動詞が存在していると考えている。その種類の動詞は、自然の語義類を構成することができる語義の意味を表している。それから、その閉じた類（あるいは相対的閉じた類）に属しているメンバー

は、同じ統語的特徴を持っている。しかし、情態動詞、特に中国語文法研究の情態動詞は、その名称や分類、他の語類との関係、文における機能、さらにはその一類（もしそれを一分類とすることができるなら）のメンバーの数やある一部のものの「身分」の問題など、なお議論する余地を多く残している。

1. 名称

ある語類についてそれを観察する角度の違いから、同じ認識対象に対して研究者によっては異なる名称を冠することは、言語学研究の歴史においては珍しい現象ではない。情態動詞はおそらく比較的多くの名称を与えられた範疇であろう。名称の違いは「名詞術語の論争に過ぎず、大したことがないように見えるが、実は違う。それは如何に正確に言語の現実を描写し記述するかに関わっている」（江天1983）。この語類は中国語研究の歴史において以下のように異なる名称が付けられてきた。もちろん、名称から命名した研究者がその類の語をどのように見ているのかについて垣間見することができる。

1.1 助動詞

『馬氏文通』では「助動字」があり、「同動字」と並んで「動字」の下位分類になっている；章士釗（1935）では「助動詞」という術語を使用し始めた。黎锦熙（1955）、丁勉哉（1956）、刘坚（1960）、梁中式（1960）、王年一（1960）、丁声树（1961）、汤廷池（1976）、赵元任（1979）、高永德（1981）、朱德熙（1982）、李人鉴（1983）、王晓钧（1983）、陶炼（1995）、周小兵（1996）、孙德金（1996）、熊文（1992, 1996, 1999）、郑天刚（2001）なども、現代中国語には「助動詞」という一類の語が存在していると考えている。丁声树（1961: 89）では、「助動詞は一般的に動詞の前に来て、例えば“肯来”の“肯”，“会唱歌”の“会”。朱德熙（1982: 61）では「助動詞は真（本当——訳者）の述目動詞の一種類である。“能、能够、会、可以、可能、得、要、敢、想、应该、应当、该、愿意、情愿、乐意、肯、许、准、（不）配、值得”などがある」と述べている。

しかし、「助動詞」という術語はより多くのものを指すのに使われることがある。黎锦熙（1955: 122）では、助動詞の「動詞を助けるものは一部に過ぎない」としたうえで、動詞とともにある意味を表し、動詞とともに述語を構成するものは、すべて助動詞であると考えている。したがって、氏の「助動詞」は一般の研究者の言う助動詞のほかにも動詞の前に用いる“被、来”なども含まれ、また動詞の後に現れる“得、了、着、来”なども含まれると考えている。一方、王力（1985: 11）の助動詞は“把、被”の類の語を指している。したがって、吕叔湘（1979: 41）では現代漢語文法研究における助動詞という概念について「助動詞とい

う名称は英語から導入されたものであり、原文の意味は『補助的動詞』であり、多くの人がそれを『動詞を補助する語』と考えるのは誤解である」と指摘する。一方、鄭貴友（1989）では「西洋の言語理論の導入により中国語に『助動詞』という一類を立てるのは中国語の実情に合わない」と指摘し、助動詞を「可能類 動詞と「心理的意志動詞」に分け、「動作・行為動詞」などと並んで動詞の下位分類とすべきだ。なぜなら「主体的に言えば、われわれは一つの範疇に属しているもの（助動詞・能願動詞）で西洋言語の二つの範疇（助動詞—法助動詞）に対応しているとしているのだ」と述べる。

1.2 能願動詞

もう一つ広く使われている名称は「能願動詞」である。王力（1943）は「能願式」、严父（1954）は「能願詞」とする言い方があるが、1956《暫拟汉语教学语法系统》（『漢語教育の文法系統試用本』）の中でその用語を使用してから、李华峰（1956）、洪心衡（1957）、牧庵（1957）、李庚鈞（1979）、謝仁富（1980）、蔣兆祥（1980）、朱大南（1980）、蔣善民（1982）、江天（1983）、刘月华（1983：105–116）、吕宏声（1986）、薛国富（1989）、孟祥英（1989）、李子云（1990）、郭志良（1993）、黄郁純（1999）、崔希亮（2003）、郭昭军（2003）などは、「能願動詞」という用語を使って他の研究者の言う「助動詞」を呼んでいる。

しかし、「能願動詞」という用語を使う一方で、「助動詞」という用語も排しない研究者もいる。例えば刘月华（1983：105）、薛国富（1989）、郭志良（1993）に、「能願動詞は助動詞とも言う」といったような言い方が見られる。薛国富（1989）では、「能願動詞という用語はその類の動詞の意味から言ったものであり、助動詞という用語はその種類の動詞の機能から言ったものである。「能願」の意味を有する語は機能的にも同じであるが、一方、機能的に同じものでも、必ずしもすべてが能願の意味を表すとは限らない、前者は範囲が狭いが、後者は範囲が広い。言い換えれば、能願動詞は助動詞の一部である。したがって、二つの概念は相矛盾していない」と述べている。その論述はある程度、「助動詞」と「能願動詞」の二つの名称の意味の本質的な区別を指摘していると言える。

1.3 衡詞

陈望道（1978：71）では、中国語の“应该、能够、肯、敢”といった類の語を“衡词”と呼んでいる。「衡词」というネーミングは、一般的に助動詞（能願動詞と言うこともある）と言われるものに用いられる。一般的に助動詞は物事の趨勢を測る、または評価するものである故、“衡词”とした。“衡”とは、評価、判断という意味である」と述べていることから、氏はこの類の語の意味と機能から命名したとすることができる。陈光磊（1980）は、この用語を受け継ぎ、「この類の語の文中における述語としての陳述機能から見て、動詞の叙

述性、形容詞の描写性と異なり、物事の趨勢を表し、即ち物事の評価と判断を表す」という陳望道の指摘は、氏が“衡詞”を確立した理由であるとしたうえ、中国語の語彙分類の中で、“衡詞”は形容詞や動詞と並んで同じ下位分類にある語類であると考えられる。この術語の使用はこの類の語が現代語における特殊な地位を物語っている。しかし、“衡詞”という術語を使う研究者はほかにあまりいなかったようだ。

1.4 能詞

高名凱 (1957: 233) は“能、可以、应当”などの一類を“能詞”と呼ぶ。氏は「“能詞”とはプロセスまたは動作が可能、当然、許可のいずれに属するかを説明するものである」としたうえで、「これらの文法成分は西洋語の助動詞 (helping verb, auxiliary verb) に似ているが、詳しく分析してみると、まったく別物である」と述べる。氏はこれらの語は機能的にすべて虚詞であるため、「その役割から“能詞”としたにすぎない」。「马建忠、黎锦熙、杨树达らのそれを助動詞とした見方には賛同しない」とした。“能詞”という術語は他の研究者が使うことがないようだが、“衡詞”と同じように“能詞”もこの類の語の中国語における独特な位置づけから名づけられたものであると言える。

1.5 情態動詞

「情態動詞」または「情態助動詞」、「情態詞」で“能”“应该”“可以”を表す。これは、明らかに西洋の言語学の“modal verb” (法助動詞) あるいは“modal auxiliary”, “modals”から来ている。例えば、Tsang (1981: 1), Tice (1986: 220), 许和平 (1991), 王伟 (2000), 忻爱莉 (2000), 谢佳玲 (2002), 李明 (2003), 高增霞 (2003), 王晓凌 (2003), 宋永圭 (2004) などがあるが、“情态词语” (陶炼 2002) や“情态标记” (鲁川 2003) とする研究者もいる。

Tsang (1981: 1) は情態範疇は意味範疇であると考え、系統的に情態動詞類における動詞成分の意味的特徴を研究することによって、中国語に情態範疇が存在していることを証明したうえで、情態と非情態助動詞を考察し、中国語の情態成分が表す時制 (tense) の意味を明らかにしようとしている。

Tice (1986: 220) では、命題がモダリティを含んでいるとき、情態動詞がその命題にモダリティの成分を加え、話し手の命題の述部に対する主観的な感情、つまり可能性、蓋然性、義務、必然性、確定、願望、潜在力、条件などを表す。“白先生会说中国话” (白さんは中国語が話せる)、“父母应该爱自己的孩子” (親はわが子を愛するべきだ)、“一定下雨” (きっと雨が降る) などの文の中の助動詞 (auxiliary verbs) の“会”も“应该”も、それに副詞の“一定”も「情態助動詞」として用いられていると考えている。

许和平 (1991) では、「情態動詞という名称は『助動詞』や『能願動詞』よりも中国語の

情態の意味と文法的特徴を反映している」としている。「助動詞」という名称を用いないのは「助動詞」という名称は英語から借用したものであり、中国語でその名称を使うのに次のような不都合がある。一つは「中国語の情態動詞は確かに動詞の前に用いられるが、情態動詞の中では一部、文の先頭に用いられるものもある」。「また、文末に現れたり、単独に用いられたりすることもある」。つまり、これらの語は「助動」だけに留まらない。もう一つは、もし、「可能」、「应该」、「愿意」、「会」が「助動詞」と認めるなら、「本当に助動詞の役割をする『体態表記』（「アスペクトマーカ―——訳者）の「了」、「着」、「过」も入れるべきだろうが、それは明らかに相応しくない」。以上の一つ目は言語内部から言ったもので、二つ目は研究者たちがこの類の語についての処理の仕方から言っている。「能願動詞」という名称を使わないことについては、この名称は「情態動詞についての認識がまだ全面性に欠けているという事実を反映している。大いに全面性を欠いている。なぜなら、中国語の情態動詞には『能力』、『願望』という客観的意味を表すもののほか、『認識』、『道義』といった主観的意味を表す情態動詞もある。しかも、後者は情態動詞において同様に相当重要な位置を占めている」。したがって「情態動詞という名称は正確に『客観的状況』を表す能願動詞をも、『主観的態度』や『主観的意見』を表す主観的情態動詞をも含め、比較的正確に中国語の情態動詞の本質的特徴を反映させることができる。

もちろん、「情態動詞」という名称も「英文法から借用した」ものではあるが、许和平の見方はある程度、問題の所在を言い当てている。したがって、本書でも情態を表す助動詞を情態動詞という名称を用いる。

2. 情態動詞の範囲

同一の認識対象に異なる名称を使うことは、研究者たちがその認識対象に異なる認識を持っていることの表れである。しかしながら、研究者たちはある基準で他の語類と区別し、しかも閉じた構造を持つ語類であるという共通の認識を持っている。しかし、研究者によっては助動詞または能願動詞の数や具体的な構成員に大きな違いが見られる。

研究者たちが挙げた助動詞または能願動詞の数量から、この種類の語の範囲に対する認識が違っていることがうかがえる。

孙德金（1996）では、助動詞の範囲の問題を解決するために、「先行研究で助動詞として認められたすべてのもの」と「意味からある種類の語に対して連想的に拡張したもの」の二つから考えられる最大108の語を確定して、「語句の意味」を分析し総合的に考察し、五つの文法機能の基準を加え、「文法機能を主に意味も考慮する」などの方法で、最終的に43語を助動詞のカテゴリーとして確定した。以下は氏の「中国語助動詞表」である。

(一) 厳格な基準で定めた助動詞

爱、打算、得 (děi)、该、敢、敢于、高兴、好意思、会、可、可能、可以、肯、乐意、能、配、情愿、容易、想、需要、要、应、应当、应该、用、用得着、愿、愿意、准备。

(二) 参考的基準で定めた助動詞

必須、得 (dé)、得以、好、懂得、乐得、企图、妄图、妄想、足以、最好。

郑天刚 (2001) の統計によると、挙げられた助動詞の数量として、刘坚 (1960) の26語、朱德熙 (1982) の27語、梁中式 (1960) の28語、孙德金 (1996) の37語、李临定 (1986) の44語、陈光磊 (1980) の55語、马庆株 (1988) の58語。「重複したものを除き、その七人の定めたものを足すと、110語になる。七人とも挙げたものは13語、それらは、“要、愿意、乐意、肯、敢、可能、可以、会、能、能够、应该、应当、该”である」。その統計は「研究者同士の意見の食い違いが大きかったことの表れであると同時に、助動詞の代表的なメンバーについては比較的一致した見方があったことの表れでもあった」と述べる。氏自身の基準から、その110語から25語を助動詞と選定するに至った。

宋永圭 (2001: 2-3) では、「多数に従う」方法で自身が研究する情態動詞の範囲を定めた。氏は中国語文法研究の18種類の文献から18文献とも情態動詞としたのは“能、能够、可以、会、应该、敢、肯”で、“要”も17文献で挙げられた。“能够”を“能”として7語の情態動詞を自身の研究範囲とした。それは“能、可以、会、要、应该 (应当)、敢、肯”である。

王晓凌 (2003: 19-20) では、似たような統計をして、丁声树 (1961) の16語、朱德熙 (1982) の27語、赵元任 (1979) の43語、马庆株 (1988) の58語という結果を得た。氏はそれらの研究で認定された情態動詞の数量から情態動詞の最大公約数 (計74語) を得た。それから六つの基準から選定し、その基準に合致した次の19語に絞った。

可以、好、得 (děi)、该、要、会、能、肯、要、敢、必須、该当、应当、应该、可能、乐意、情愿、愿意、能够。

そこから分かるように、情態動詞の範囲と具体的なメンバーの情態動詞としての身分については、いまだ一致したところか比較的近い見方さえ得られていない。主な原因は学者によって情態動詞の範囲の策定や具体的な判断基準が異なり、その基準の有効性も異なることにある。従って研究者たちがどのような基準でこの一類の語の範囲を定め、その具体的な構成員の身分を確定したかを見てみる必要がある。

3. 範囲策定の基準

3.1 情態動詞の統語的特徴

情態動詞をカテゴリーの一つとして見なすに当たって、研究者らはまずその統語的特徴か

ら定義する。

3.1.1 英語の情態動詞の統語的特徴

英語の助動詞を研究する学者は助動詞が一つの閉じた機能的種類であると考え。まず、英語の助動詞はいわゆる NICE の特徴を持っているとする (Hoddleston 1976: 333)。即ち否定 (negation) と共起する (例えば *can't*) ; 疑問時の倒置 (inversion, 例えば *Must I come?*) ; 代替操作 (“code” 例えば, “*He can swim and so can she*” の中で, 二つ目の *can* は動詞 *swim* に対して代替操作ができる) ; 肯定の強調 (emphatic affirmation, 例えば “*He will be here*” の “*will*” はイントネーションの強く発音する位置にある)。

しかし, Palmer (2001: 100) は情態動詞以外の助動詞, 例えば *be*, *have* も同様にいわゆる NICE の特徴を持っており, 情態動詞はそれ自身の特徴を持っているとして, 以下の幾つの特徴は助動詞の NICE 特徴以外, 英語の情態動詞自身の持つ独特な特徴であると考え。

- (一) 一部の方言を除いて, 英語の情態動詞は互いに共起しない。例えば **will can come*, **may shall be* などの形式を持たない。
- (二) 第三人称単数は -s 形を持たない。例えば **He oughts to come*。
- (三) 不定式を持たない。例えば **to can* または *canning* もなければ, 「*I hope to can come tomorrow*」もない。
- (四) 命令の語気を持たない。例えば **can be here* も **Must come now!* もない。
- (五) *Must* は過去形を持たない。そのほかの情態動詞は過去形を持っているが, *could* を除き過去の時間の意味を表さない。
- (六) 相補関係 (suppletive) の否定形式を持っている。例えば, 認識的モダリティの [必然] を表す *must* の否定形式は *can't* (外部否定, モダリティの否定) あるいは *may not* (内部否定, 命題の否定) である。
- (七) 情態動詞が認識的モダリティと道義的モダリティを表す場合, 否定とテンスにおいては形式的には区別がない。

そのように英語の情態動詞の識別の基準は一般助動詞共通の特徴と情態動詞独特な形式を併せ持っており, 計11項目に上る。これらの基準の中では, 肯定の角度から定義されたものもあれば, 否定の角度から定義されるものもある。

これから, 中国語の文法学者が情態動詞を分類する際の基準を見てみよう。

3.1.2 中国語情態動詞の統語的特徴

中国語文法学者が助動詞, 能願動詞あるいは情態動詞というカテゴリーを設ける際にも, やはりそれらの統語的形式の特徴を見つけることから始めた。刘坚 (1960), 梁式中 (1960), 王年一 (1960), 丁声树 (1961: 89), 赵元任 (1968, 1979: 322-324), 李庚钧 (1979), Li & Thompson (1981: 172-182), 朱德熙 (1982: 61), 江天 (1983), 汤廷池 (1988: 228-240,

1997), 傅雨賢, 周小兵 (1991), 陶煉 (1995), 孫德金 (1996), 謝佳玲 (2002: 167), 王曉凌 (2003: 18), 宋永圭 (2004: 24) などは, 助動詞の統語的特徴を指摘しまたは広く検討した。彼らが指摘し検討した助動詞の統語的特徴を総合すると, 以下のようなものに及んでいる。

- (一) 単独で述語として成り立つ。
- (二) 単独で質問文の答えになれる。
- (三) 単独で発話として成り立つ。
- (四) “X不X”式において反復疑問文になれる。
- (五) “不”によって否定できる。“没”によって否定できるものもある。
- (六) “hěn”で修飾できる。
- (七) 用言(動詞)目的語を導くが, 体言目的語を導かない。
- (八) 連続して用いることができる。
- (九) 重ねて用いることはできない。
- (十) 後ろに“了”, “着”, “过”などのアスペクトマーカ―が来ない。

以上の十か条は先行研究で多く指摘されたものもあれば, 少数の研究者が指摘した特徴もある。例えば, “怎么样”でしか質問できない, “所……的”構造に入らない, 前に“被”や“给”が来ない, 連体修飾語になれない, 補語を伴わない, 形容詞の修飾を受けられない, 名詞化できない(例えば, “他是能的”), 主語の前に来ない, 直接には目的語を導かない, 命令文に現れない, 把構文に現れない, 受け身文に現れない, 主語取向の性状副詞の修飾を受けない, などが挙げられる。

3.2 分類基準の欠点と有効性

3.2.1 分類基準の欠点

統語的・機能的特徴を情態動詞の識別の基準とする考えが提起されて以来, 早くも提起された基準の有効性に欠点があるとの指摘が絶えなかった。

湯廷池(1988: 228-235)はLi & Thompson(1981: 172-174)で提起した中国語助動詞の8か条の文法的特徴に対して疑問を投げつけた。その中の5か条には大量の反例があり, しかもその反例の多くはLi & Thompsonの著書から見つけたと指摘している。そこで氏は「ただ単に文法的特徴から国語の助動詞を定義するのは無理がある。国語の助動詞の文法的特徴の制限を緩くすると, 助動詞と一般動詞の境界は識別しにくい。逆に助動詞の文法的特徴を厳しく制限すると, 国語の助動詞は残りわずかとなってしまふ」と述べ, Li & Thompsonは「助動詞の文法的特徴を厳しく制限しすぎて, 国語に助動詞の存在を否定してしまうことになる」とし, さらに, 中国語の助動詞は「英語のような明確な『形態標識』にも, 英語の助動

詞のような独特な『統語的表現』にも欠けており、実に明確で独立とした文法範疇としては成立しにくい」と指摘している。したがって、動詞と助動詞の間を無理して線引きする必要がない。なぜなら、「語と語の間にはもともと白黒を分ける境界線が存在しない」からだ。そこで、湯廷池（1988: 234-235）では中国語の助動詞を策定するには次の三点さえあれば十分だとする。

- (一) 「認知」または「意味機能」から見れば、助動詞は「情態」（モダリティ）を表す。
- (二) 表層構造の「統語的機能」から見れば、助動詞は主要動詞の前に出現し且つ否定または諾否疑問文を作るといった一般動詞の持つ機能を備えている。
- (三) 「下位範疇化」から見れば助動詞は「動詞フレーズ」（VP）を補足語（目的語）とする語類である。

陶煉（1995）も「助動詞内部の差異の方が一致しているところよりも多い。個性が共通性よりも強い」と考え、項目ごとに先行研究によって言及された「助動詞自身の表現形式の文法的特徴に関する」例外を挙げた。例えば、反復疑問の形にできない助動詞がある；「不」で否定できない助動詞がある；「不A不」の形式を持たない助動詞がある；前に「很」を付けることができない助動詞がある；単独に質問に答えることができない助動詞がある；実際、「A怎么样」の疑問文は人々が思っているほど多くないなどである。従って、氏は助動詞内部は「充分に個性化した世界であり、われわれはその中から助動詞といった種類の語のしっかりした基礎となり得る文法的共通性を見つけない」。従って「助動詞内部にある様々な異なっているところ（と一致しているところ）から目をそらさず真正面から研究することによって「個々の助動詞の間の複雑で様々な相補的または重なり合っている関係を明らかにしなければならない」。一方、「助動詞は一つの統一した語の分類として、その共通性はその文法的特徴にあるのではなく、その文中における独特な役割にあり、その独特な文の構造にある」と指摘する。

孫徳金（1996）も「先達が認定した助動詞の文法的特徴の大半は対内的普遍性を有さない」、従って「客観的に二つの基準の下で助動詞の二つの範囲を与える」。一つは5カ条の「文法的機能の基準の下での助動詞の範囲」であり、もう一つは「助動詞の文法的機能を主として意味的基準の範囲も配慮する」。それを一種の「剛柔両立した処理の仕方」として考えている。もちろん、それでも「助動詞の範囲についての問題を解決したとは言えない」と自らも認めている。

そうしてみると、これまでの研究の助動詞の分類基準としての文法的特徴についての探求と説明はどれも徒勞の嫌いがあるということになるが、それはあまりにもお気の毒である。では、今までの研究で提起されたあれほど多くの統語的・機能的特徴の助動詞の定義に対する有効性をどのように理解すればよいのか。

3.2.2 定義基準の有効性

先行研究で言及された定義の基準の有効性について、以下のように理解されるべきである。

【1】先行研究で言及された情態動詞の定義の形式と機能的基準としては、情態動詞の範疇内部のある構成員にとっては相対的に有効であり、且つ、多くの研究者が情態形式と機能的特徴についての探求も確かにある程度においてはその種類の語に対する認識を深めた。

【2】ある形式や機能的特徴は情態動詞を識別する基準として、例えば重ね型がない、アスペクトマーカの“了、着、过”を伴わない、等々は、すべての情態動詞に当てはまるようだ。その点から、違う角度から見つかった形式と機能的基準は情態動詞のカテゴリー内部の各要素の有用性と解釈の有効性に程度の差が存在することが見てとれる。

【3】一方、必ずしも適切ではない基準もある。たとえば、「単独に述語になれる」について、単独に述語になるときの付加的条件、即ち、単独に述語になるときは主要動詞の省略と見なすべきだと主張する研究者がいる。前者は単純に形式から見たが、後者は意味と語用の内部に深入りした。両者は矛盾しておらず、ただ観察する角度の違いからきた異なった意見であり、後者が前者に対する認識の深まりであると言える。従ってその二つの意見とも情態動詞範疇の構成員を識別するにあたって程度の差こそあれ有効的である。

【4】幾つかの先行研究で提起された個別な基準は、情態動詞の識別には有効であるが、同時に現代中国語の語彙体系の中の他の範疇にも当てはまることがある。情態動詞の定義として有効とは言え、情態動詞という範疇にとってみれば、排他的性質の程度の問題はある。

【5】幾つかの先行研究で提起された個別な基準で、例えば、「助動詞は主語の前に現れない」とすると、少なくとも形式面から情態動詞であるはずのものを範疇の外に押し出してしまいかねない。それはおそらくその学者らが用例の観察範囲と角度及び処理方法にそれぞれ特別な思いを持っているからであろう。そのような形式または機能的特徴を情態動詞の範疇の定義の基準とするかどうかについては、一概には言えない。

【6】上述した研究で言及された形式と機能的特徴のほかに、情態動詞の範疇の構成員を識別する変数を増やすために、他の特徴を見つけることができるだろうか。例えば、英語学者が指摘した英語の情態動詞の「相補関係の否定形式がある」という特徴が、中国語の情態動詞にもあるのか。答えは Yes である。例えば、認識的モダリティの [必然] を表す“肯定”の否定形は“不肯定”ではなく、“不会”または“不可能”である。一方道義的モダリティの [必要] を表す“必須”の否定形も“不必須”ではなく、“不可以”である。また、例えば、中国語の情態動詞にも動力的モダリティ、道義的モダリティと認識的モダリティの間の多義性を持っている。それらの多義的情態動詞が異なるモダリティを表すとき、形式や機能の面で相応する異なる特徴を呈する。ならば、「情態動詞の多義的特徴」も現代中国語

の情態動詞の特徴を識別する基準の中に入れることができるということになるだろうか。また、例えば、形式的基準のほかに、湯廷池（1988: 235）のように助動詞が必ずモダリティを表すと規定する。孫徳金（1996）のように「語気またはモダリティの役割をする文法範疇」は「助動詞の本質的属性である」と認めるのか。

以上のような角度から、先行研究の中で論じられた情態動詞の定義範囲の基準とした形式と機能的特徴を見れば、それらの基準に対して比較的明白な認識を持ち、不必要な論争を避けることができると言える。

4. 典型的範疇と情態動詞の身分の確定

4.1 現代中国語の情態動詞の定義の本質

現代中国語の情態動詞の定義の本質は、実は以下のような幾つかの語の間の線引きにある。

一つ目は副詞と情態動詞の線引きである。先行研究の線引きの基準の中で、副詞と情態が共通した統語的特徴がある。例えば、「情態動詞＋述語」という形式が述目構造かそれとも連用修飾構造かについての論争そのものが、情態動詞が動詞なのかそれとも副詞なのかの問題に関わる。ある情態動詞、例えば、“必然、必須、一定”引いては“可能”まで、統語的分布と機能的特徴において副詞と類似性を持っており、学者たちに多くの決断しがたい難題を突き付けている。

二つ目は、実質的意味を持つ動詞と情態動詞の線引きである。情態動詞は動詞の下位分類か付属の類か、または独立した分類の一つか、それは、情態動詞の研究において議論の絶えない問題である。その原因はもちろん情態動詞の実質的意味を持つ動詞としての特徴と、それ自身の特徴を併せ持つことに由来している。また、兼類現象があるものもある。例えば、“会”、“想”は実義動詞としても情態動詞としても用いられるため、それらを完全に丸ごとどこか一つの種類に入れようとする、議論と疑問は避けられない。もう一つの原因は、研究者たちが情態動詞の線引きをするときに基準が必ずしも同じではないことにある。しかも基準が決まってもその基準を最後まで一貫するとは限らないため、異なる処理方法が出て当然である。例えば“打算”、“企图”、“妄图”、“妄想”などを異なる基準で分類すると助動詞とする学者も、述目動詞とする学者も出てくる。

三つ目は助動詞と情態動詞の分野の問題である。英語にはなお助動詞と情態動詞の分野の問題がある。例えば、前述した英語の *have*, *be* は助動詞であって、情態動詞ではない。現代中国語にも同じような問題が存在しているかどうかは、まだあまり注目されていないが、検討する価値がある。

4.2 動詞—情態動詞—副詞という連続体

すでに情態動詞は動詞及び副詞とは一種の比較的特殊な関係にあることに気付いた研究者がいる。傅雨賢, 周小兵 (1991) は、「助動詞は述目動詞と副詞の間にある」。例えば、「後ろに述語フレーズしか来ない」という基準で「助動詞が述目動詞と同一性があるかそれとも副詞と同一性があるか」を判断するのが難しい。従って「助動詞は述目動詞の特徴も副詞の特徴も持っているため、述目動詞と副詞の間にあると言える」。「その二種類の品詞の特徴を併せ持っており」、「そのメンバーには述目動詞寄りのものもあれば、副詞寄りのものもある」と考えている。

それと近い見方をしている研究に黄錦章 (1989) がある。氏は「Aux-Vp はどんな構造か」という問題に明確な答えがない。その原因の一つは、自然言語の中に動目構造から連用構造までは一つの連続で且つ徐々に変化していく過程であり、一方の Aux-Vp は、ちょうどその過程の境界線辺りに位置しているためであると考えている。“应该、会、可以、能 1、要 1”といった動詞グループは、機能的に「波粒二象性」(粒子と波動の二重性)を有している。即ち、このグループの動詞は統語的に明らかに二重性——述語中心語と連用修飾語といった、相反する性質を同時に持っている」ため、「考えられる構造はただ一つ、即ち動目構造と連用構造の外延で交差し、『Aux-Vp』は一種の中間状態の構造類型である」と考え、助動詞を実義動詞と副詞の過渡地帯にある品詞類としている。

Ross (1972) は「動詞>現在分詞>過去分詞>受身動詞形式>形容詞>前置詞>形容詞性名詞>名詞」といった「動詞/名詞の連続体」の範疇を提起した。陈宁萍 (1987) もその連続体範疇の理論を用いて現代中国語の動詞と名詞の線引きを検討し、現代中国語の品詞類は普遍的動詞形から普遍的名詞形へと移行していると考える。史有为 (1996) もいわゆる「剛柔両立」の方法で多角的視点から「連続型品詞類」の理論的モデルの仮説を立てた。「一種の幾つかの核心または基幹部分を中心にした多方的、多重的に広がり、互いに連続した過渡区域を持つ品詞類のモデル。その核心部分と基幹部分は比較的多くの剛性を有するのに対して、境界線の部分は比較的多くの柔軟性を有し、柔軟的モデルを構成する」としている。その三種類の仮説性の高い理論的モデルは、傅雨賢, 周小兵 (1991) と黄錦章 (1989) の「助動詞」についての考え方に理論的な裏付けを与えた。従って、ここでも現代中国語に「動詞—情態動詞—副詞」という連続体が存在していると仮定しておいてもよさそうだ。

「動詞—情態動詞—副詞」という連続体を仮定するには少なくとも二つの根拠がある。一つは情態動詞の発展の歴史から、情態動詞は一般的に実質動詞から発展してきた、まず実質動詞と統語的特徴が比較的似ている根源的モダリティの用法ができて、それから副詞と統語的特徴が比較的近い認識的モダリティの用法ができた。もちろん、情態動詞はさらに本当の副詞に「漂流」するかどうかについては、さらに多くの根拠を探す必要があるし、なお且つ

現代中国語の発展を待たなければならない。二つ目は助動詞研究の歴史において、先行研究でその中の一部のメンバーについては意見の不一致がなかったようだが、一方、その両端の一部のメンバー、副詞に近い方と動詞に近い方のメンバーについては議論が絶えない。そこから、研究者たちの見ている対象は確かに核心部分と過渡地帯にある部分に存在していることを物語っていると言える。

4.3 属性的範疇論と典型的範疇論

ある一部のメンバーの中からある種の特徴を見つけて、それらの特徴で他のメンバーを定義する。それらのメンバーから一つのカテゴリーを作る。それは属性範疇論（典型的範疇論とも言う）のやり方である。多くの先行研究にみられる現代中国語の助動詞という範疇の成立はこの方法によって実現したと言える。従って具体的にその範疇の幾つかのメンバーについて論じるとき、自然とそれらのメンバーが本来規定された特徴を持っているかどうかの議論がある。最も典型的な例は“必須”と“一定”である。多くの研究ではそれらが“必須不必須”，“一定不一定”による疑問形式を持たないという特徴があるから、それらを助動詞の範疇から排除すべきだと言っている。そのようにカテゴリー内部のメンバー同士に事実上、差異が存在しているため、特徴に厳格に対応しているかどうかによって、あるメンバーがその範疇に属しているかどうかを規定すると、研究者同士の認識上の不一致を引き起こすのが必至である。

典型的範疇論はそれに似ているような意見の不一致を解決するために参考を与えることができるかもしれない。典型的範疇論は範疇のメンバーに「よいメンバー」と「悪いメンバー」があると考えるようにする。最も「よいメンバー」は他のメンバーと共通した属性を最も多く持っているもので、その範疇の原型（プロトタイプ）をなしている。「比較的よいメンバー」はその範疇のメンバーと共通した属性を比較的多く持っているもので、典型的なメンバーと呼ぶことができる。「悪いメンバー」は範疇内の他のメンバーと共通した属性を少ししか持っていないもので、その範疇の周辺的メンバーと見なされる。同じ範疇の中のある二つのメンバーは共通した属性を持っていないように見えても、範疇内の第三のメンバーによって繋げることができる。なぜなら、その第三のメンバーは二つのメンバーとそれぞれ一つまたは幾つかの属性において共通性を持っているからである。それがいわゆる範疇メンバーの家族的類似性である。範疇内の多くのメンバーが同じ範疇に属しているから見なされるのは、往々にしてそのような家族的類似性によって繋がっているからである。また、典型的範疇論は範疇の境界線がはっきりとしたものではなく、ぼんやりとしていると考える。範疇の中の悪いメンバーは、他の範疇の属性をいくらか持っているかもしれない。したがって、中国語の情態動詞の範疇と実質動詞の範疇、情態動詞の範疇と副詞の範疇の間にもそのよう

なぼんやりとして辺境地帯が存在しているのと同じように、それらの範疇とぼんやりとした周辺地帯を作ってしまうのである。

4.4 幾つかの異議のある情態動詞の身分

範疇理論を参考にして、カテゴリーの中の幾つかのメンバーの身分について、長期にわたって議論のある情態動詞を納得のいく定義ができるかもしれない。

“必須”はメンバーの身分において最も議論の多い語の一つであり、副詞とする学者もいれば、情態動詞とする学者もいる。卢甲文(1984)では、そのような議論が存在する原因は「語と語の結合能力からみて『必須』は能願動詞、副詞と少なくとも二つの共通点がある」、すなわち、どちらも述語の前に置き、述語性フレーズを構成することはあるが、名詞の前に置いて体言性フレーズを構成することはない。しかし、どちらかと言えば、「『必須』は能願動詞寄りで副詞寄りではない」。なぜなら、その一、「必須」も能願動詞も「『是……的』の中に入れることができる」。その二、他の能願動詞と同位構造を作ることができる。例えば、“可以而且必須”、“必須发展而且能够发展”など。一方の副詞はそのような使い方がない。“必須”が「X不X」または「不X不」型に嵌めることができない原因については、「その否定の形は“无须”、“不须”、“不必”であり、“不必須”ではない」からとして、それが“必須”の能願動詞としての特異性であるとしながらも、「それを能願動詞に入れることに影響がない」と述べている。氏のこれらの考えから典型的範疇理論で“必須”という語の品詞問題を考えている兆しがうかがえる。

许和平(1991)は“肯定”と“必須”を「準情態動詞」と見なす。「情態(モダリティ——訳者)を表しながら朱德熙(1982: 61)で提起した比較的通用している基準を完全に満たしていない情態動詞を見逃してはいけない」として、“必須”と“肯定”に言及した。なぜなら、典型的情態動詞と意味的に密接な関連性と対称性を持っているものがあり、それらの語を見落とすと、「情態動詞の全体性と系統性を損ない、実用性に欠け、対外中国語教育には不利である」。それから「それらの語が典型的な情態動詞の幾つの特徴を欠いているのは、論理的意味の制約を受けているからだ」。例えば、準情態動詞の“肯定”と“必須”は“A不A”の形式を持たないのは、論理的意味の制約を受けているからだ。つまり、「中国語では『必要性』を表す『認知』、『道義』、『願望』の情態動詞はいずれも『外部否定』形式を持たない」。なぜなら、「これらの情態動詞にはみな対応する論理的相補形式を持っているからである」。例えば、“肯定”の相補形式は“不会”で、“必須”の否定相補形式は“不许”、“不准”、“不能”、“不得”などである。「準情態動詞」という言い方は、典型的範疇論の非典型的の成員の考え方とかなり近い。

しかし一方で、许和平(1991)は“肯定”と“一定”、“肯定”と“必然”を比較したうえ

で、“必然”と“一定”を副詞とした。その理由に“肯定”は「意味の近い副詞の“必然”とも明らかに違う。“必然”と比べて“肯定”の方がより純正な情態動詞“可能”に近い；一方，“肯定”と“一定”は多くの場合は互いに置き換えることができるとはいえ，純正な情態動詞の“可能”と比べると，“肯定”の情態動詞としての特徴はより顕著である」と考えている。しかしながら，氏（許和平）が“一定”を副詞として処理した三点の論拠は“肯定”が“一定”よりも“可能”に近いことも，“一定”は情態動詞ではないことも証明できているとは言えない。むしろ“一定”という情態動詞の多様性（即ち，認識的モダリティを表すほか，道義的モダリティの[保証]，[命令]などの強い意志の意味を有する）を証明しているに過ぎない。しかもある意味では，“一定”は“肯定”よりも情態動詞の特徴を多く持っていると言える。例えば“一定”は“不₁一定”，“不₁一定不”といった形式を持っている。そして，その外部否定を受けるという情態動詞の特徴も氏（1991）の論述の出発点の一つである。従って，許和平の論証の一致性から，“必然”と“一定”を情態動詞のカテゴリーに残しておくのも根拠がなくもない。

他の文献で議論のある情態動詞，例えば“想、愿意、情愿、用、准、许”などについても，典型的範疇理論に基づいてそれらの情態動詞としての身分の問題を説明することができると思う。

4.5 本書の情態動詞の範囲

これまでの討論に基づき本書では情態動詞が基本的に以下のようなメンバーであると考えられる。

典型的な情態動詞：能、能够、要、会、应该、应当、可以、可、肯、敢。

比較的典型的な情態動詞：必須、肯定、得、乐意、情愿、许、愿意。

多くの文献で言及された“配”，“值得”は助動詞に属しているということには異議を持っていないが，それらはモダリティを表しているか，もしモダリティを表しているなら，どのようなモダリティを表しているかについては，まだ確たる見解を持っていないため，そのカテゴリーのメンバーの身分についても，まだ当分確定できない。したがって，それらを情態動詞には入れていない。

文献中のおおよそ情態動詞に属している語に対する呼び名の問題を分析したのは，名称の違いが名称に留まるものではなく，この語に対する研究者たちの異なる見方を示しているからである。それらを情態動詞としたのは，主にそれらの語は現代中国語のモダリティを具現化した主な形式だからである。文献中の情態動詞の範囲の策定とその基準は，観察の出発点と角度によって大きく異なる。統語的特徴を主眼に規定した情態動詞のカテゴリーとしての定義基準は欠点もあるが，有効性もある。「動詞—情態動詞—副詞」の連続体という仮説は，

長い間、学界における情態動詞の定義をめぐる論争の背後にある原因を明らかにする手助けになるかもしれない。そして典型的範疇理論を用いて情態動詞の範疇を規定するのも、有用な方法かもしれない。文献にみられる範疇のメンバーとしての身分に議論のある幾つかの情態動詞についても、典型的範疇理論で処理することができる。本書の情態動詞の大まかな範囲についても情態動詞の典型性の不均一の角度から定義を試みたものである。

注

- 1) 彭利貞 (2007) 82-104頁。
- 2) 彭利貞 (2007) 9-10頁。澤田 (2014) iii - ix頁。

参考文献

- 彭利貞 (2007) 《現代汉语情态研究》中国社会科学出版社
澤田治美編 (2014) 『ひつじ意味論講座 第3巻 モダリティ I：理論と方法』ひつじ書房